

國學院大學學術情報リポジトリ

『おくのほそ道鈔』と漢詩文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚越, 義幸, Tsukagoshi, Yoshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000227

『おくのほそ道鈔』と漢詩文

塚越義幸

一、はじめに

『おくのほそ道鈔』とは、『俳文学大辞典』（角川書店）では、

俳諧注釈書。自筆稿、大二。村徑むらみち著。宝曆九（一七五

九）・一〇、道心金剛幻序。同一〇・一、荻澗水跋。現在知られる『おくのほそ道』の注釈的研究書の中で最古のもの。詳細な注記があり参考資料としての価値は高い。綿屋文庫蔵。

と解説されており、本書が『おくのほそ道』の現存最古の注釈（元禄版が刊行され、ほぼ六十年後）で、参考資料としての価値は高いとされている。著者は村徑で自筆草稿のままであることがわかる。それに道心金剛幻が序文を、また荻澗水が跋文を添えている。これら三人については、村徑が自筆紙片で、

道心金剛幻

豊瑞律師トモ号ス荒陵山ノ隱僧也
荻澗水

萩ノ玄常号ス浪花ノ醫家也富春叟ノ入_レ門_{嗜_レ詩深弟也}
 村径

姓ハ鴻池名ハ好之字ハ信古 松跡菴湖照入_レ門_{嗜_レ俳諧}
 奥の細道ノ註右三選也

と書き記しており、最後に「右三選也」とあるように、三人がこの注釈に関わっていたことがわかる。

道心金剛幻は、号は豊瑞律師で、荒陵山（四天王寺）の隠僧である。杉浦正一郎氏は、彼の位牌から「豊瑞金剛幻法師で湖照門下では直淵と号す。明和四丁亥年十一月三十日。行年六十一歳」であったと示されている。¹⁾ 金剛幻は僧侶であり、湖照（におてる）の門下として俳諧に勤しんでいたことがわかる。湖照については、『俳文学大辞典』では、

俳諧師。生没年未詳。別号、松跡庵。淡々門_{（たんとくもん）}。享保期に大阪で活躍したが、享保一一年、点業を廃して故郷へ帰った。編著、『続にはくなぶり』、淡々高点付句集『門柳曲』、作法書『蓬萊山』ほか、追善集、一周忌『もなかの鐘』〔直淵編〕一三回忌『両大仏』〔村径編〕

とあり、淡々門下で十三回忌『両大仏』は村径が編集をしているのである。深沢了子氏は、

金剛幻は大坂四天王寺の僧侶で、村径より四歳上の兄弟子で、享保二十一年の湖照の一周忌追善集『もなかの鐘』（元文六年）の編がある。湖照の文台を、のち同門の定雄に渡されるまで預かっていたのも金剛幻であった（宝暦四年半時庵社中歳旦）。宝暦元年頃に出家したらしく、その後は特に誰かについて学んだ形跡はないが、俳諧を止めてしまったわけではなかった。村径とは親しく、出家後、湖照から授けられた『俳諧御傘』注釈書『蓬萊山』を譲った²⁾り、村径の句を評するなど（村径著『四時望』宝暦九年）の交友が知られる。

と述べられており、彼の俳諧活動及び村径との交友関係が明白にされた。金剛幻はその序文で

好士村径一帖のさとし難きを倦こと年月とそ。粵かしこき睦ひの老者荻氏は、そのか米東奥にいまそかりし時、親疎の因ミによりく此書のうハさを聞ふれられし。今はむ

かし語りのやことなきにつけて、將そのより所かれのなぞらへなとをかたみに尋ね求められしこと種を、愚童に摸すべく猶わらハへか思ひよるをも加へてとなり。おもんみるに、此神のみちそなたの佛ののりから、国の聖の教を敬ひ尊ミをくゆらせしは、是か道にして前後代未曾有の龜鑑ならむや。そもく井の蛙の淺識をもて、なにはのあし短き筆に四大海の一滴をそきてし、謬解臆説はただ正しうし給へらんを冀ふ。其惟此鈔我を罪せされ。(序・跋の句読点は筆者加點)

と村徑が『おくのほそ道』の真意をどう理解したらよいか悩んでいた時に、昵懇の老齡荻澗水が東北に行かれた折、この本のうわさを聞き、その抛り所となることを追究し、子どもにも模範なるように彼らの考えをも加味して明示してくれたことを述べた。

次に荻澗水であるが、号は玄常、大阪の医者で、富春叟の門下で詩を嗜んでいたという。彼については、深沢氏は、

『四時望』の澗水序に、宝曆八年七十一歳と記され、村徑より大分年上であつた。俳歴は不明だが、『四時望』に

一句を寄せていることから、俳諧と無縁な人物ではなかつた……漢学のほうで適當な人物がみつからず、或いは宝曆十二年に大阪で没した淡々門の俳人富春齋瓢水の門人であつたか。

と述べられており、俳諧との繋がりには確かにあつたと思われるが、彼が詩の師と仰ぐ「富春叟」は漢学者田中桐江(一六六八〜一七四二)のことではなかつたかと思われる。吉田銳雄は『田中桐江傳』(池田史談會 大正十二年)の中で、

〈氏名字号〉

田中桐江名は省、字は省吾、一字は宗魯、雪華道人と号す。通称は初め平右衛門と云ひ、後清太夫と云ふ、後故ありて自ら姓を富、名を逸、字は日休、一字は春叟と改め桐江と号す、又別に竹灣、豁然居士の号あり

〈呉江社を設く〉

されば贅を執り教を請ふもの次第に多く、医を業とせる清地以立、其の子以悦、同じく檜垣古山、其の子山雲、荒木秋江、張澗水等相集まり、茲に呉江社と名づくる会を設け、桐江其の盟主となり、講説に詩文に其の盛を致せり、其の集を名づけて呉江水韻と云ふ……

〈門人〉

張激水 名は矩、池田の人にして、来明とは莫逆の友なり、事ありて仙台に行き、芭蕉街に住し、日に簡編に對せしが、享保元年、桐江の事を友人なる奥人大和田東発の言に聞きて、贄を載せて來謁し、遂に従ふて詩を学ぶ……

と述べられているように、「富春叟」は洞江であることは間違いない。さらに門人の中に示された、「張激水」が「荻激水」であった可能性も高い。とすると、荻激水は漢学の素養が高かったことが窺い知れる。彼の自筆跋文は、

世之誹諧称芭蕉翁者、非其本色也。蓋翁之胸中、瀟洒磊落飄出塵表。其游誹諧者、宿好之所致而抑皮毛耳。故吐唾動感人。比諸誇巧眩奇之属、大有逕庭矣。如此篇波瀾頓挫抑揚卷舒、殆似得文章家之法者。然今之言誹諧者、閑漫看過而不賞其妙。甚乃不及把卷者亦有矣。吾友村徑子者少壯嗜誹諧、屢翫此篇而稱其妙、且憾世人稱之者殆稀也。於是詳搜文意、確考引據爲之註解。就其道友豐瑞師而正之。師亦多其意而與其事且作之序。於是翁之高腦燦然明于此矣。

藁成以示之。余素不識誹諧者、雖然曾識翁之行逕、常稱此篇以爲鷄群孤鶴。此拳雖似好事者、爲翁開生面也。無寧在村徑瑞師手乎。感情不堪痒、遂據數語爲之跋云。

と白文で書かれている。³⁾

当時芭蕉翁のことを賞賛するものは多かつたが、「おくのほそ道」の真意を解き明かした者は稀であつた。そんな中でわが友村徑が、その文意を明らかにし、その典拠を考証し注釈を作成した。それを彼の友人である豊瑞師が批評し、序文も付した。彼ら二人の手により、芭蕉翁の創意が輝きを取り戻すことができた。そこに僅かな言葉を添えて跋とした。

というふうに着目して村徑の功績を讃えた。
最後に、著者村徑であるが、自ら姓が鴻池で、名は好之、字は信古、湖照の門下で俳諧を嗜んだことが明記されている。一方『俳文学大辞典』では、

俳諧作者。正徳元（一七一）〜天明二（一七八二）。

七・一七、七二歳（過去帳）。武田氏。通称、半兵衛。別号、五嶺館・福力庵。大阪鴻池家の家司。湖照（における）門。編著『福力庵句選』『おくのほそ道鈔』。

とあり、生年では芭蕉より六十五年後、鴻池屋の家司で、俳諧は湖照（生没年未詳、淡々門）に師事していた。杉浦正一郎氏によれば、村径は、代々鴻池屋の番頭の家柄で、彼の父の代までは鴻池姓であったが、村径が初めて武田氏（伴兵衛）を名乗ったという。深沢氏は、

享保二十一年の湖照の歳旦以来、淡々系の俳書に入集し、宝暦二年には湖照の十三回忌追善集『両大仏』を上梓している。享保末、二十歳過ぎに湖照に入門したと考えられる。柿衛文庫にはその句稿・伝書の類が多く残されており、筆まめであったことをうかがわせる。

と述べられており、彼の俳諧活動の状況が窺える。

以上、注釈にかかわった三人を紹介したが、杉浦氏によれば彼らは稿本『俳諧四時望』でも、序や文章を並べる間柄だったようで、『おくのほそ道鈔』でもその間柄が活かされていると

思われる。『奇説つれづれ草紙』上（安永三年 淡々述 富天編）には、

許六が風俗文選も甚人により出来不出来あり。俳諧文章は奥の細道を手本とすべし⁴

とあり、淡々自ら『おくのほそ道』を俳文のお手本とすべきことを述べている。淡々門の湖照に師事した村径や金剛幻らが『おくのほそ道』に興味を示さなかつたはずはない。そこに知人である荻漱水が加わってその注釈に着手したということになる。そのような中で、彼らは俳諧という共通の基盤を持ちつつも、金剛幻は僧侶として、荻漱水は漢学者としての立場から、仏典や漢籍からの引用が多く取られるであろうことも十分予測できる。

本稿では、特に荻漱水が主に担当したであろう漢詩文の引用を取り上げ、その傾向や特質を考えてみたいと思う。該当箇所は七十八箇所あるが、以前それぞれの箇所の考察のみを行った⁵。今回は、それらの特徴を明らかにし、村径らの注釈の姿勢（漢詩文の引用という立場）を捉えてみたいと思う。『おくのほそ道鈔』では、注釈箇所が深沢氏は二百六十箇所（同箇所）に引

用が複数の場合はそれもすべて数に入れてい」とされているが、その中で漢詩文が七十八箇所（実際該当箇所二種類以上の引用があっても一箇所と見なしたので、実際の漢詩文引用の数は百十四例である）あると言うことは、決して少ない数字ではない。

『おくのほそ道鈔』は稿本であるが、諸本として管見の限りの次の二本が存在する。⁶⁾

①天理大学付属天理図書館（綿屋文庫）本

大本 自筆稿本上下二冊 序・跋・村径自筆紙片有り

題簽 おくのほそ道鈔上・奥の細みち鈔下

内題 おくのほそ道鈔上・奥の細道鈔下

②八戸図書館本

大本 写本上下二冊 序・跋・村径自筆紙片なし

題簽 奥の細道上・奥の細道下

内題 おくのほそ道鈔上・奥の細道鈔下

以上の二本であるが、今回は自筆紙片のある①を底本として考えた。

二、『おくのほそ道鈔』に引用された漢詩文

次に、『おくのほそ道鈔』に引用された漢詩文について考察してみたい。『おくのほそ道』の現存最古の注釈（稿本）『おくのほそ道鈔』は、『俳文学大辞典』でも「詳細な注記があり参考資料としての価値は高い」とあるが、評価は必ずしも高くはない。

杉浦正一郎氏は、『奥の細道』最古の註釋本」（国語・国文学）昭和十五年六月）

『奥の細道鈔』本文の註釋の内容であるが、古註の常として讀者の要求にぴったりとした要領を得る註等は少く、概ね和漢の古典に多少のつながりを求めている贅言の多きは當時の註釋としては止むを得ない。（傍線は筆者による。以下同様）

と、要領を得た注は少ないとされている。しかし、そこに多少なりともつながりのある和漢の故事が用いられている点はその特色と言えよう。また、『奥の細道古註集成2』「諸本解説」（笠間

書院 平成十三年)では、

……注解は詳細で、不必要と思われる出典解説などもある。しかし、冒頭文中の「月日は百代の過客」の説明に「春夜宴桃李園序」を引用し、「草加」の条の「白髮の恨みを重ね……」に『詩人玉曆』を引用するなどしているのは、以後の注釈の基盤となるもので、その注解は高く評価されよう。この注解本は版本として出版されていないからであるが、かなり筆写・参考にされた模様である。

と不必要な出典が多い中、一部「冒頭」や「草加」の条の注は高く評価できると、賛否両論である。さらに深沢氏は、

引用書目は多岐にわたるが、冒頭の李白「春夜宴桃李園序」をはじめとし、現在典拠と認められているものと一致する例は少なくない。一方で「唐詩選」など、芭蕉が馴染んだと考えにくい書を引く例もある。

と一部評価しつつも、芭蕉が直接目にした可能性の低い『唐詩選』の引用に疑問を抱かれている。⁷⁾

このように、『おくのほそ道鈔』の評価は分かれるが、以後の注釈に採用されるようになる評価すべき注として冒頭李白の漢文が挙げられているが、次に『おくのほそ道鈔』における漢詩文の引用の状況について見てみたい。

前述のように、漢詩文の引用箇所は七十八箇所である。その中で引用されている漢籍及びそれらの用例数は以下のようである。用例の多い順に列挙してみる。(同じ箇所で同じ典拠で『出典名』が複数示されている場合は、それぞれの書名を一例ずつとして換算した。日本漢詩は準漢籍であるが、今回入れた)

- 十一例 〓 『論語』
- 九例 〓 『杜律』(『杜律集解』か)
- 八例 〓 『孟子』
- 七例 〓 『字彙』
- 六例 〓 『莊子』・『文選』
- 五例 〓 『白氏文集』
- 四例 〓 『詩経』・『古文真宝後集』・『唐詩選』
- 三例 〓 『左伝』
- 二例 〓 『中庸』・『老子』・『書経』・『大学』・『大明一統志』
- 一例 〓 『礼記』・『列子』・『淮南子』・『四書大全』・『呉越春

秋』・『晋書』・『搜神記』・『山海經』・『博物誌』・『述異記』・『海内十洲記』・『遊仙窟』・『世説』(『世説新語補』か)・『唐文粹』・『続文章規範』・『事文類聚』・『爾雅』・『礼部韻略』・『古今韻会举要』・『本朝文粹』

その他、作者名だけのものが、李白Ⅱ五例、蘇軾Ⅱ四例、王勃Ⅱ二例、韓愈Ⅱ一例、杜牧Ⅱ一例、王安石Ⅱ一例、陳与義Ⅱ一例ある。(杜甫については三例あるがいずれも『杜律集解』に所収されているのでそちらで換算した)他に書名とは言いがたいが「長恨歌伝」が二例ある。これらの用例を合計すると七十八箇所、百十四例になる。

漢籍については、『論語』や『孟子』が多く、また『大学』・『中庸』・『詩経』・『書経』・『春秋左氏伝』・『礼記』も引用されているように、漢学の素養としての四書五経が多数登場するのは自然なことと言えよう。特に漢学の素養の高かった荻澁水が携わっていたのだからなおさらであろう。その他、芭蕉の憧憬が深かった『杜律』や『莊子』の引用回数が多いのも、村径らの周知する所であったと思われる。さらに『文選』・『白氏文集』・『古文真宝後集』などわが国の文学に伝統的に多大な影響

を受けていた漢籍が用いられるのも至極当然の流れであろう。漢語の語釈として『字彙』が使われたのも芭蕉の時代から常識であったと思われる。

以上、引用が多かった漢籍は、芭蕉自身もよく活用したものであり、また李白や蘇軾などの詩人の作品も同様である。このように、村径ら特に荻澁水だと思われるが、芭蕉の時代にもよく読まれていた漢籍や詩人の作品を典拠として、注釈を作るという姿勢を取っていたことがわかる。しかし、『唐詩選』だけはその例外であろう。『唐詩選』は周知の通り、享保九年に初めて和刻本が刊行されており、「芭蕉が馴染んだと考えにくい」漢籍であったと思われる。このことについては後で触れたい。

『おくほのそ道鈔』における漢詩文の引用の実態は以上のようにであるが、実際どのような注釈として引用されているかを具体的に示してみたい。注釈のあり方については、前述のように後の注釈の手本となるような引用箇所と牽強附会な不可解な箇所があることは先人が評する処だが、ここではその二点について触れ実際の注釈を例示してみたい。

①後の注釈にも受け継がれたもの

『おくほのそ道鈔』の注釈の内容が、特に漢詩文の引用につ

いては、後の注釈に多大な影響を与えていたことは事実である。例えば『おくのほそ道鈔』に引用された漢籍の中で、二例以上引用されたものについては『大明一統志』以外はすべて『奥の細道菅孤抄』の引用書目にも挙げられおり、また桃喬舎可常注『おくのほそ道』（安永四年）（以下可常本と呼ぶ）や蓼也苑五視注『頭書おくの細道』（享和元年）（以下五視本と呼ぶ）にも注がかなりそのまま活用されていることから、その影響力の大きさは十分認められる。さらに現在の注釈にも活かされているものが多く存在する。以下それらの代表的なものを挙げてみたい。（漢数字は引用箇所を通し番号である）

- (一) 月日ハ百代の過客にして、行かふ年も又旅人也
 夫天地者萬物之逆旅。光陰百代過客。春
 夜宴_ニ桃李園_ニ序、李太白。唐文粹及續文
 章規範事文類聚前集古文後集載_ス之_ヲとかや。
 或曰、光陰とハ日月の異名と。行かふ年もと註
 し添えたるにや。

この一文は『おくのほそ道』の冒頭の部分で、村径らは注で李白の「春夜宴桃李園序」の該当部分と題名・作者名を挙げて

いる。この典拠は現在でも定説になっており、『奥の細道古註集成』の解説にあるように、まさに以後の注釈の基盤となったものである。『おくのほそ道鈔』からおよそ二十年後に刊行された『奥細道菅孤抄』（蓑笠庵梨一 安永七年）でも、

古_ニ文_ニ後_ニ集_ニ、春_ニ夜_ニ宴_ニ桃_ニ李_ニ園_ニ序_ニ、夫_レ天_ニ地_ハ者_ハ萬_ノ物_ノ
 之_レ逆_レ旅_、光_陰者_ハ百_ノ代_ノ過_レ客_、ト_天地_ノ運_レ旋_日
 月_ノ行_レ道_ヲ旅_ニ喻_レ逆_レ旅_ハハ_タゴ_ヤ光_陰ハ_日影_ノウ_ツリ
 行_{コト}過_レ客_ハ旅_人ヲ_云ナ_リ

となっており、『おくのほそ道鈔』と同じ箇所を引用している。また『奥のほそ道解』・『奥細道洗心抄』・『奥細道通解』などの江戸期の注釈書のほとんどすべてが、この李白の文章を典拠として注解している。さらに最近の注釈である尾形仍氏『おくのほそ道評釈』（角川書店 平成十三年）でも、「月日は百代の過客にして」の語釈で、

李白「春夜宴桃李園序（春夜ニ桃李園ニ宴スル序）」
 （『古文真宝後集』卷三）の冒頭に「夫天地者万物之逆旅。
 光陰者 百代之過客。而浮生若夢（夫レ天地ハ万物ノ逆

旅ナリ。光陰八百代ノ過客ナリ。而シテ浮生ハ夢ノ若シ」とあるのを踏まえたもの。

と解説されている。芭蕉が永遠に無所住な旅人の運命を、李白の「春夜宴桃李園」序の冒頭を敷衍援用して著述したものだという村径らの見解は、現代まで受け継がれていることになる。

一方、出典に関して『おくのほそ道鈔』では、『唐文粹』・『続文章軌範』・『事文類聚前集』・『古文真宝後集』の四書を列挙している。いずれの漢籍にもこの李白の文章は所収されているが、「春夜宴桃李園」序の題名になっているのは『続文章軌範』・『事文類聚前集』・『古文真宝後集』の三書だけである。残りの『唐文粹』では題名が「春夜讌 諸從弟桃花」序」となっている。ここでは単に李白のこの文章が所収されている漢籍名を、機械的に羅列しただけなのかもしれない。このあたりが村径らの過剰な注釈の現れなのではないかとも受け取れる。しかし注釈の中で出典を一本化することは困難であり、また牽強付会に陥る危険性もあるので、複数列挙している点は良心的だと評価してよいのではないか。『奥の細道菅菰抄』では、『古文真宝後集』を出典としている。以後もこの出典は踏襲され定説化

されて、現在にまで至るのである。

(四十一) 南部口をさし堅め夷をふせくと見たり偕も義臣
すくつて此城にこもり功名一時の叢となる國破
れて山河あり城春にして草青ミたりと

城春、岬木深杜律 草青ミたりと轉せられて古
戦場の感情を余す歟

これは、平泉の高館の一文であることは言うまでもない。芭蕉が義経ゆかりの高館に登って古戦場跡を望み、その「叢」を目の当たりにして、人間の営みのはかなさと自然の驚異に触れ、「國破れて山河あり城春にして草青ミたり」と表現したのである。

村径らは「國破れて山河あり城春にして草青ミたり」の典拠として、「杜律」つまり杜甫の五言律詩「春望」を挙げている。この典拠「春望」の首聯「國破山河在 城春草木深」はあまりにも有名なので無用の指を立てることはしないが、彼らは首聯を二句とも挙げず、二句目の「城春 岬木深」のみを示している。これは芭蕉が「草ミたり」と転成した原詩句だけを挙げようとしただけなのだろうか。いずれにせよ、杜甫の「春

「望」の詩句を挙げ芭蕉のアレンジを明確にし、その理由として「古戦場の感情を余すか」としたのは、適切な注釈であると言える。

この部分の注として、『奥細道菅菰抄』では

國破れて山河あり城春にして艸青ミたりとハ杜_カ甫_カ春_カ望_カ
 詩、國_ニ破_テ山_ニ河_ニ在_リ、城_ニ春_ニ草_ニ木_ニ深_シノ句ヲ取_テ青_ニミ_{タリ}と
 換骨せし也

となっており、「春望」を挙げつつ、「青ミたり」へのアレンジ（換骨奪胎）を明確にしている。『おくのほそ道鈔』の注解はこゝでも活かされていていよう。

（六十二）象潟や雨に西施かねふの華

西湖_カ初_カ晴_カ復_カ雨_カ 東坡
 水_ニ光_ニ激_ニ灑_ニトシテ_ニ方_ニ好_ニ山_ニ色_ニ空_ニ濛_ニ雨_ニ亦_ニ奇_ニ
 若_ニ把_ニ西_ニ湖_ニ比_ニ西_ニ子_ニ淡_ニ粧_ニ濃_ニ抹_ニ也_ニ相_ニ
 宜_ニカラン

是絶唱にして此景西施に比すに猶勝れりと。
 第二句は前文にきり入、餘を以茲に校量し、
 一樹をあいらひ、自己の風骨を述るにや。

この句は、朦朧と雨に煙る象潟の情景を、中国の美女西施の憂いに満ちて目を閉じた姿に見立てて、「ねむ」と「合歓の花」を掛詞として巧みに用いた名句である。

村径らは、この句に対し蘇軾の七言絶句「西湖初晴復雨」を示し、さらに西施の「顰みに倣う」の故事としての内容を持つ「莊子」外篇天運の文を引用した。

蘇軾の詩は『聯珠詩格』巻二や『禪林句集』（転句・結句のみ）にも所収されるが、村径らが示したこの詩は、その題名と本文から「千家詩」所収のものであることがわかる。

（『聯珠詩格』では、題名は「西湖」、結句の五字目は「兩」）

諸注でも蘇軾のこの詩を引用しているが、『奥細道菅菰抄』・『奥の細道傍注』・寛政版加注本『おくのほそ道』・『奥細道洗心抄』でも、結句は「淡粧濃抹也相宜」になっており、それらも同様、『千家詩』からの引用だと思われる。（ただし『奥の

莊子外篇天運、故西施病_レ心_ニ而_レ顰_ニ其_ニ里_ニ其_ニ里_ニ之_ニ醜_ニ人_ニ見_レ而_レ美_レ之_ニ婦_ニ亦_レ捧_レ心_ニ而_レ顰_ニ其_ニ里_ニ其_ニ里_ニ之_ニ富_ニ人_ニ見_レ之_ニ堅_ニ閉_レ門_ニ而_レ不_レ出_レ貧_ニ人_ニ見_レ之_ニ挈_ニ妻_ニ子_ニ而_レ去_レ之_ニ走_レ彼_ニ知_レ美_レ 顰_ニ而_レ不_レ知_ニ顰_ニ之_ニ所_ニ以_ニ美_ニ惜_ニ乎_ニ

「細道傍注」では、「聯珠詩格二、題西湖詩……」と『聯珠詩格』所収の詩も合わせて掲載し、『句解和談奥の細道』・『奥細道歌枕抄』・『奥細道通解』・『泊船集解説』では、『聯珠詩格』の本文を引用している。この出典は、可常本・五視本はもとより、殆どの注釈で引用されている。

一方、『莊子』外篇天運の文章であるが、これはその後五視本以外あまり引用されていない。

②注釈として不可解と思われるもの

次に注釈としては必要ないと思われるものを挙げてみる。

(十九) 田一枚植て立去る柳かな

寄るを去るに転じて一樹を領せられたり 哉

又奇なり 文選猛虎行 渴不^{シテ}飲^マ盜泉水^ノ熱不^{シテ}息^{イコハ}惡木蔭^ニ

この句は、遊行柳での句であるが、早乙女の手際よさで、田植えがあつという間に終わり、つかのまではあつたが西行の歌の世界に浸ることができた。でも、まもなく現実にはひきもどされ、次の目的地白河の関へ急ぐべく、その場を立ち去つたとい

う句意になろうが、そこに村径らは、陸機「猛虎行」(『文選』所収)の「渴不^{シテ}飲^マ盜泉水^ノ熱不^{シテ}息^{イコハ}惡木蔭^ニ」と陸機の「猛虎行」の冒頭二句が引用されている。この二句は『訓蒙故事要言』巻之九 雜部上(宮川道達 元祿七年)に

文選二十七云。陸機猛虎行曰。渴^{カウシテモ}不^レ飲^マ盜泉水^ノ。

熱^{シテモ}不^レ息^{イコハ}惡木蔭^ニ盜泉ト惡木ハ其ノ名善ラズ。君子其

ノ名ヲ惡ムユヘニ喉カハケドモ盜泉ノ水ヲ飲ズ。熱キ日ニテモ惡木ノ陰^{カゲ}ニヤドラズ。

とあり、崇高な人間は少しでも汚れたものには近づかない意味として当時格言として認識されていたことがわかる。これに基づいてこの句をこの詩句を踏まえて解釈すると、

そこには、崇高な志を持ち続け、ことわざにある「渴^{シテ}不^レ飲^マ盜泉水^ノ熱^{シテ}不^レ息^{イコハ}惡木蔭^ニ」のごとく西行の詠んだ柳すら悪木と考えてい、長く憩うことをあえて拒んだ一人の清廉な旅人の姿があつた。⁹⁾

となると考えられる。特に波線の部分では、従来の解釈書には

見られないような解釈がなされてしまふ。

(六十三) 象馮や料理何くふ神祭

食不_レ厭_レ精膾不_レ厭_レ細_レ乃_レ至_レ割_レ不_レ正_レ不_レ食_レ論語郷黨
篇

この句は、芭蕉と曾良が汐越の鎮守熊野神社の祭祀にたまたま来合わせた折に作られたものとされ、ここでは曾良の句として掲載されている。

村径らは、この句に対し『論語』郷黨篇の一部を引用して注解を施している。ここに引用されている文は、途中「乃至」と中略された部分があるが、その部分も補って意味を取ってみると、

飯はいくら精白されていてもよく、なますはいくら細かくてもよい。飯がすえて味が変わり、魚がいたみ肉が腐つたものは食べない。食べ物の色がよくないもの、にのにおいよくないもの、煮え方のよくないもの、食の匂をはずれたものはそれぞれ食べない。切り方の悪いものは食べない。

となる。中略の部分も含め、この部分は孔子の食の心得を述べたものである。村径らは、「料理何くふ」という中から、特に異境の地での食事への注意を孔子の説を挙げて説明しようとしたものだろうか。あるいは神祭りという神聖な行事の折には、なおさらその料理には関心を持つべきだと考えたのか。いずれにせよ、句の解釈に直接関わる典故だとは言えない。

(六十七) ある草庵にいさなハれて

秋(秋) 涼し手毎にむけや瓜茄子
論語公冶長篇 宰予晝寝 子曰朽木不可_レ雕
也 糞土牆不可_レ朽也 於_レ予歎何_レ誅_レ

この句は、前書きにあるように「ある草庵(斎藤一泉の草庵)」に誘われて、そこで詠んだものである。句意は、瓜やナスという季節の野菜がもてなされたので、それぞれ手で剥いて頂きましょう。残暑ながらも涼しさを呼んでくれる光景であるなあということ。

これに対し、村径らは『論語』公冶長篇の一節を引用している。ここは、宰予(我)が昼寝をしていたのに対し、孔子が「腐った木には彫刻が出来ない。ぼろぼろの土塀には上塗りが

出来ない。土台が崩れてしまっているものには、手の施しようがない。今の宰予もそれと同じなので、どうして責めようか。いやそれに値しない」と叱咤した有名なところである。ただ、この『論語』の一節がどのように註釈として意味を持つのかは、いささか不可解である。諸氏が「要領を得ない」「不必要な注釈」と説かれるように、漢詩文の引用においても不可解なもの unnecessary と思われるものの一つである。

以上、『おくのほそ道鈔』における漢詩文の引用の実態を賛否の両面から見てみた。紙面の関係から、数例しか挙げられなかったが、その特徴は現れていると思われる。

三、『おくのほそ道鈔』と『唐詩選』

『おくのほそ道鈔』に引用されている漢籍は、ほとんどが和刻本を有し芭蕉が目にした可能性のあるものばかりであるが、『唐詩選』だけは芭蕉の時代和刻本が存在しておらず出典として掲載するには問題があるように思われる。ただ、仁枝忠氏は「芭蕉は『唐詩選』を読んでいたと思う」と断言されている。¹⁰⁾ その場合の『唐詩選』は当然明版の原本を指すが、それらは明版の原本を指しており、漢学者に直接師事をしていない芭蕉に

とってそれを読むことは不可能に近かったと言わざるを得ない。ただ『唐詩選』の異本としての『唐詩訓解』（袁宏道校）はすでに芭蕉の時代に和刻本が存在していたので、そちらの可能性はある。¹¹⁾

そのような『唐詩選』を村徑らはなぜ引用したのか、その理由について可能性を考えてみたい。先ず引用（四例）の実態を明らかにしたい。

(八) 行春や鳥啼魚の日ハ泪(旅立ち)

……唐詩選 送_ル秘書晁監還_ニ日本_ニ 鰲身映_レ天黒魚眼_ヲ
射_レ波紅_{ナリ} 王維

(四十三) 窓をひらき二階を作て風雲の中に旅寐することぞ、

あやしきまで妙なる心地ハせらるれ(雄嶋)
唐詩選 樓_ニ觀_ニ滄海日_ヲ門_ニ對_ニ浙江潮_ニ 桂子月中_ニ落_リ天_ヲ
香雲外飄_ル 賂賓王

(六十八) あか〜と日ハ難面もあきの風(金沢)

唐詩選 秋日 返_リ照入_ル三閭_ニ巷_ニ 憂來誰_レ共語古_ニ道_ヲ
少_シ人行_ニ秋風動_ス禾黍。耿湓

(七十三) 終宵秋風聞やうらの山(全昌寺)

唐詩選 何處^レ 秋風至蕭々^{トシテ} 送雁群^ヲ 朝來入^テ 庭
樹^ニ 孤客最先聞 劉禹錫

以上四例をすべて挙げたが、いずれも最初に『唐詩選』と出典を明確にしている。ただこの中で現在でも典拠として用いられているのは、(七十三) くらいである。¹²⁾

『唐詩選』七巻の流行には、享保九年の南郭先生校訂の和刻本刊行をはじめ、荻生徂徠の主張する古文辞学の主張(明の子古文辞派の主張である文は秦・漢、詩は盛唐を踏襲)であるの推奨が関わっているが、そのことは、『徂徠先生答問書』下(享保十二年 根本遜志編)に、

經學は古注。歴史は左傳・國語・史記・前漢書。文章は楚辭・文選・韓・柳迄は不苦候。惣而漢以前の書籍は。老・莊・列之類も益^{まし}二人之知見^を候。是も林希逸解は悪敷候。詩は唐詩選・唐詩品彙。是等を益友と可被思召候。

とあることから窺える。徂徠との交流の深った田中桐江

(『田中桐江傳』によると、元禄十二年に柳沢吉保に仕えて以降交流が始まる)に詩を学んだ荻澗水が、これらの動向を受けて

『唐詩選』を重視して注釈に撰取したとしても不思議ではない。

古文辞学は享保期に流行するが、その影響下で俳諧でも復古運動が起る。¹³⁾ そのことは、湯浅常山の『文会雜記』(寛延二年)に、

徂徠学ニテ世間一変スト……但今ノ時、復古ト云フコト
俳諧ニマデ云ヒテ¹⁴⁾

とあることから窺える。その先駆けとして祇徳が「俳諧古学」を打ち立てる。彼は、『誹諧句選』(享保二十年刊)の中で、

誹諧も古文辞を用ふべし。詩歌連の三道も、皆かくのごとし。道は貞徳にありて、句は芭蕉にあり。然らば、元禄の頃、芭蕉流の誹集を仮に古文辞と指すべし。¹⁵⁾

と述べ、俳諧の古文辞を標榜し、その範(特に句作において)を蕉風の俳書に求めていたことを示した。同書は『唐詩選』¹⁶⁾ からの影響を受けての命名であることは明らかであるが、『菅廟

八百五十年」(祇徳一門 宝暦二年)に、

唐詩選

時も詩も代や百年を三ツの春

雪解ゆきげに習ふ家くの道

青丹よし奈良の舞台の草燃えて

門雪

真峨

竹堂たけどう

という三物も掲載されており、『唐詩選』との関わりの深さを実感させられる。また『俳諧古選』(嘯山 宝暦十三年)においても、『唐詩選』の影響が大きかったことはすでに明らかにされている。¹⁸⁾

以上のことから、芭蕉が目にした可能性の低い『唐詩選』を村径らが敢えて取り入れたという理由に、徂徠の旧知であった田中桐江に詩を学んだ萩澱水も古文辞学の何らかの影響を受けていたこと、そして古文辞学が享保以降俳諧においても標榜されていたことなどが挙げられる。いずれにせよ享保九年の『唐詩選』の和刻本刊行以来、『唐詩選』がさまざまな形で影響を与えていたことがわかる。

四、おわりに

以上『おくのほそ道鈔』と漢詩文との関わりについて、その該当箇所七十八箇所・百十四例を調査した結果を考察してきた。注釈には村径他序・跋を認めた金剛幻や萩澱水らも加わり三人が携わったが、村径や金剛幻の俳諧の師である湖照の師である淡々が「俳文は奥の細道を手本とすべし」と述べていることも影響してか、村径が『おくのほそ道』を講読する際不明なところもあるので、金剛幻や萩澱水の力も借りて注釈を試みたという経緯である。

そこには漢学者田中桐江に師事した萩澱水の役割だったとも思えるが、注釈の箇所約三分の一に漢詩文が引用されていた。引用された漢籍については、『論語』・『杜律』(集解?)・『孟子』・『莊子』など芭蕉が目にした可能性の高いものが占められていたが、『唐詩選』四例については、その可能性が低く出典としては疑問も残る。しかし『唐詩選』を利用した背景には、萩生徂徠の提唱した古文辞学の影響を受け、彼の旧友田中桐江に師事した萩澱水が敢えて活用したとも十分考えられる。また徂徠の主張が俳諧へも派生し、祇徳の俳諧古文辞を生み出し

『俳諧句選』が刊行される。その書名には『唐詩選』が介在しており、その後、嘯山の『俳諧古選』も同様の傾向が見られた。このような状況の中、村径らは芭蕉にはなじみの薄い『唐詩選』を敢えて出典とした可能性が高い。そこに『おくのほそ道鈔』の漢詩文引用の特色の一つがあると思われる。

また典拠については、漢詩文においても後世に受け継がれたものと牽強付会で注釈の意図が測りにくいものがあった。しかしながら牽強付会なものも可常本や五槻本などでも注釈が活用され、またかなりの出典が『奥の細道菅菰抄』に活用されているので、『おくのほそ道』の注釈の嚆矢として重要な役割を果たしたと言えよう。

注

- (1) 杉浦正一郎「『奥の細道』最古の註釋本（『国語・国文』昭和十五年六月）による。以下「杉浦氏」は同様。
- (2) 深沢了子「芭蕉の受容―淡々系の場合―」（『近世中期の上方俳壇』和泉書院 平成十三年所収）による。以下「深沢氏」は同様。
- (3) 萩澁水の自筆跋文は白文だが、天理本上巻の最後に、訓点の付いた同文（村径筆）があるので、参考までに示しておく。
世之以俳諧稱芭蕉翁者、非其本色也。蓋翁之胸中、瀟灑落飄出塵表。其游俳諧者、宿好之所致而抑皮毛

耳。故吐唾、動感一人。比諸誇、巧眩奇之属、一大有之。庭矣。如此篇、波瀾頓挫、抑揚卷舒、殆似得文章家之法者。然、今之言俳諧者、閑漫看過、而不賞其妙。甚、乃不及把卷者、亦有矣。吾友村徑子者、少壯嗜俳諧、屢覓此篇而稱其妙、且憾世人稱之者殆稀也。於是詳搜文意、確考引據、爲之註解。就其道、友豐瑞師而正之。師亦多其意、而與其事、且作之序。於是翁之高胸、燦然明于此矣。藥成、以示之。余素不識俳諧者、雖然、曾識翁之行、運、常稱此篇、以爲鷄群孤鶴。此卷雖似好事者、爲翁開生面也。無寧在村徑瑞師之手乎。感情不堪、痒、遂摭數語爲之跋云。

（句説点は筆者加点）

- (4) 『京都大学国語国文学資料叢書 奇説つれづれ草紙』（臨川書店 一九七八）による。
- (5) 拙稿「『おくのほそ道鈔』と漢詩文―その引用と解釈をめぐって―」（一）（『八』）（『野州國文學』第六十九号）第八十三号 平成十四年（平成二十一年）で七十八箇所の注釈に示された漢詩文を調査した。
- (6) ①の天理本の翻刻は、島居清「『奥の細道鈔』翻刻と解説」（『國文學解釈と鑑賞』昭和三十三年三月号）や久富哲雄・西村真砂子編『奥の細道古註集成 1・2』（笠間書院 平成十三年）に所収されている。また②の八戸図書館本の翻刻は、松尾真知子「八戸市立図書館所蔵『おくのほそ道鈔』解題と翻刻」（『梅花日文論叢』第十一号 平成十五年三月）があり、①との校異も示されている。それによると校異は四十三箇所である。
- (7) 島居清氏は「『奥の細道鈔』翻刻と解説」（『國文學解釈と鑑賞』昭和三十三年三月号）で、

古註の常として大して必要もないような仏典・儒書等の引用が多いのもこの為であろう。

と金剛幻と荻澗水が加わったことについて、このようにコメントしている。

(8) 『勉誠社文庫122 奥細道菅孤抄』(勉誠社 昭和五十九年)による。以下同様。

(9) 拙稿「『奥の細道』と『文選』陸機「猛虎行」——田一枚植て立去る柳かな」の解釈をめぐって——(『野州國文學』第六十七号 平成二十三年三月) 参照。

(10) 仁枝忠『芭蕉に影響した漢詩文』(教育出版センター 昭和四十七年)による。

(11) 猪口篤志氏は『日本漢文学史』「俳句・川柳(雑俳)と漢文学」(角川書店 昭和五十九年)の中で、

貝原益軒が『初学詩法』の中で『唐詩訓解』を『唐詩選』と称しているので享保九年(一七二四)の和刻本発刊以前に芭蕉が唐詩選を見ていた可能性もある

と述べられているが、ここでの『唐詩選』は『唐詩訓解』を指していると思われる。

(12) 尾形仿『おくのほそ道評釈』(角川書店 平成十三年)で、この詩(『秋風引』)を引いているが、出典は『唐詩訓解』と『円機活法』を挙げている。

(13) 加藤定彦『都会派俳諧の展開——蕉風俳諧とのせめぎあい』(『日本の近世12 文学と美術の成熟』中央公論社 一九九三年所収)による。

(14) 『日本随筆大成』第一期14(吉川弘文館 一九九三年)による。

(15) 『古典俳文学大系11 享保俳諧集』(集英社 昭和四十五年)による。

(16) 飯倉洋一「『祇徳の立場』——『誹諧古学』について」(『國文學』二〇〇三年七月)による。

(17) 『関東俳諧叢書 第六卷』(青裳堂書店 一九九六年)による。

(18) 田中道雄「『俳諧古選』の成立」(『近世文学 作家と作品』中央公論社 一九七三年所収)及び小財陽平「三宅嘯山、発句鑑賞の方法——『俳諧古選』短評をめぐって——」(『江戸風雅』第四号 平成二十三年六月)では、『唐詩選』特に『唐詩訓解』との関わりについて論じられている。